

2025年1月19日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教23

### 「良くなりたい」

イザヤ35：5～10、ヨハネ5：1～9a

ベトザタの池を囲む回廊には、大勢の病人、体の不自由な人、麻痺をしている人が横たわっていました。どうして横たわっているのか。池の水が動くときに、真っ先に入る者が癒されたというのです。昼夜を問わず、その瞬間を見逃すまいとみんな水が動くのを見続けている。それは異様な光景だと思います。水が動くのを固唾を吞んで待ち続ける。もしそういう環境に身を置かなければならないとしたらどうでしょう。

しかし、この異様な光景はまさに現代社会の縮図ではないでしょうか。人々は迷信に取り憑かれています。そして我先へと人を押しつけて自分が勝ち上がりたいという思いに支配されています。そのような競争社会をわたしたちは紛れもなく生きています。そしてそこには必ず取り残された人たちが必ずいるのです。この人は言いました。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです」（7節）誰も自分を気にかけてくれる人がいない。助けてくれる人がいないのです。そこに人間の根本的な問題があります。それは他者の不在、さらに言えば愛の欠如ということではないでしょうか。ベトザタ（恵みの家、憐れみの家）の名前とは程遠い現実がそこにはありました。

この他者の不在こそ、人間の罪そのものです。本来なら人間には共に生きるべき神さまという大いなる他者がおりました。けれども神さまと共に生きられなくなった。神さまとの約束を破り、樂園を追放されました。そこから人間の孤独が始まりました。また「助ける者」（創世記2：18）として造られたアダムとエバの関係も相手に罪の責任をなすりつけるような関係になります。責任転嫁が起こります。そしてその子どもたちカインとアベルにいたっては、妬みからとうとう相手を殺してしまうのです。まさに他者の不在、愛の欠如があります。ですから、このベトザタの池に集まる人たちは、病気でかわいそうな人、単に社会からの落伍者ということではない。まさにそこに横たわっているのはわたしたちです。ベトザタ（憐れみの家）とは、神さまの憐れみを必要としている罪人であるわたしたちの家なのです。

「さて、そこに38年も病気で苦しんでいる人がいた」（5節）とあります。おそらく人生の大半をそのように病に支配されていたと考えてもよいでしょう。そうなるとその状態が当たり前になります。良くなることをあきらめるのに十分な年月がそこにあります。ある説教者は「絶望への安住」と表現します。それが常態化し、自然になってしまうと、違和感を感じなくなる。「このままでいい」と思ってしまう。このことも重大な問題です。例えば、今、世界では戦争が起こっています。間もなくロシアによるウクライナ侵攻から丸三年になります。初めは大変なことが起こったと思

ましたが、だんだんそれが当たり前になってしまう。戦争があることが常態化する。そのようにして世界は知らず知らずのうちに破滅へと向かって行く。わたしたちも罪が常態化、自然なことになっている。「どうせ罪人だ」「どうせ変わらない」そういう諦めが支配してしまうのです。そしてそのまま放置していくならば、わたしたちはこのまま滅んでいくでしょう。それはサタンの思う壺なのです。

でも、この人間の限界を超えて、これではいけない。この状況に抗う。それが信仰です。それがイエスさまと出会うということ。わたしたちが毎週ここに集まり神さまを礼拝するのはそのためです。「イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気で苦しんでいるのを知って、『良くなりたいか』と言われた」（6節）イエスさまはこの人と出会ってくださいました。まず何よりもイエスさまのまなざしがこの人に注がれていることが重要です。この人がイエスさまを見つけたのではない。イエスさまがこの人を見て、そして長く患っていることを知って、そして声をお掛けになられた。そのようにしてイエスさまの方が「見て」「知って」わたしたちを見つけ出してください。それは失われた一匹の羊をどこまでも探して見つけ出してください神さまの憐れみに他なりません。そして「良くなりたいか」と言われます。これはこの人が忘れかけていたことだったでしょう。自分が良くなるはずがない。そう考えて諦めていた。でもそれを思い起こさせてくださった。「良くなりたいか」あなたは良くなれる。絶望の中に安住するのではない。そこから脱出して、そして本来の健やかに生きるべき人生へとわたしが連れて行ってあげよう。わたしたちはそのようなイエスさまの救いに招かれています。

「イエスは言われた。『起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。』すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩き出した」（8～9節）「起き上がる」は、聖書ではよみがえりを意味する言葉です。「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる」（エフェソ5：14）その縛り付けてきた「床」これは絶望に安住すること、罪と死に横たわる人生から決別して、起き上がれ。そして歩きなさい。それは罪の中に安住するのではなく、本来の生きるべき人生、それは他者を回復する人生、他者とともに生きる人生へ歩き出すということではないでしょうか。神さまを愛する、人を愛する人生へと歩み出すことに他なりません。

そのためにイエスさまは十字架で死んでよみがえってくださいました。この人をただ見て、知ってくださっただけではない。この後、十字架において、わたしたちを縛り付ける絶望に自ら身を横たえてくださり、そして三日目に起き上がってくださいました。この絶望から立ち上がられた。この人にどこまでも寄り添いイエスさまがその身を合わせられて、この人を絶望の淵から立ち上がらせてくださったのです。

一人で立ち上がるのは大変です。介護の経験がある人はよくわかるでしょう。お年寄りが一人でベッドから立ち上がるのは難しいことです。でも誰かが体を抱えて一緒に起こしてくれると立ち上がれる。イエスさまと一緒に立ち上がらせてくださるのです。それが十字架とよみがえり。それならば、わたしたちもその一歩を踏み出すことができるのではないのでしょうか。

今日もイエスさまはわたしたちに「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と言われます。自分で勝手に見切りをつけて、絶望の淵に安住してはいけません。わたしたちはよみがえりのイエスさまに結ばれているのです。イエスさまと一緒に立ち上がらせてくださいます。明日は今日よりもっと良く生きることができるでしょう。

天の父よ。辛いこと、悲しいことがあると、人生を見切ってしまうような、諦めてしまうような思いに駆られます。ともするとその絶望に安住してしまいます。けれども、そのようなわたしたちにイエスさまは「起き上がりなさい」と声をかけてくださいます。この朝、その御声を聞きました。イエスさまと一緒に立ち上がらせてくださいます。どうか希望を持って一歩を踏み出すことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。